

コンブ増産に向けての国際シンポジウム開催

平成 25 年 5 月 26 日、札幌コンベンションセンターにおいて、日本水産工学学会主催の春季シンポジウム「北日本と極東ロシア水域のコンブ生産」が開催され、稚内水産試験場調査研究部の川井主査が組織・運営を行いました。



図 1、発表者の集合写真（敬称略）（向かって左から幡宮、寺井、ガラニン、前田、藤川、川井、栗林、綿貫、品田）。

発表は以下の 9 名により行われ、国外からの講演者も加わった国際的なシンポジウムとなり、関係者も含めた参加者が合計 77 名と盛会でした（図 1）。

課題は以下の通り

1. 順応的に進めるコンブ増殖場造成（株）アルファ水エコンサルタンツ 綿貫 啓
2. 本州におけるマコンブの増養殖（独）青森県産業技術センター 藤川 義一
3. リシリコンブモニタリングデータの解析（独）北海道立総合研究機構 品田 晃良
4. 栄養塩とコンブ藻場再生（独）北海道立総合研究機構 栗林 貴範
5. 雑海藻駆除によるコンブ漁場の保全（独）北海道立総合研究機構 寺井稔
6. マコンブの遺伝的多様性研究 ～藻場の保全に向けて～ 北海道大学大学院環境科学院 前田 高志
7. Present situation of fisheries research on kelp in South Sakhalin, Russia（ロシア 南サハリンにおけるコンブ漁場の現状）SakhNIRO（サハリン海洋漁業学研究所）Dmitry Galanin
8. 北海道とロシア（サハリン）日本海のコンブ藻場の比較と今後（独）北海道立総合研究機構 川井 唯史
9. コンブの生産安定に向けた北海道の取り組み 北海道水産林務部 幡宮 輝雄
10. 総合討論

前半の司会は、北海道立総合研究機構水産研究本部（以下、道総研）のOBである山内繁樹氏、後半は北海道大学フィールド科学センター 四ツ倉典滋准教授により、総合討論は道水産林務部の幡宮輝雄水産局長により進められました。

本シンポのトピックスとしては、平成 20 年～24 年にサハリン海洋漁業学研究所と道総研が行った共

同研究「北海道とサハリンのコンブ漁場の環境に関する比較調査」の SakhNIRO の代表であるガラニン・ドミトリー氏が、ロシアで得られた研究成果を発表し（図 2）、北海道で得られた成果に関しては私（川井）が報告を行いました。この概要としては、サハリンと北海道では、ともにコンブが重要な水産資源であり、海洋環境は資源変動に大きく影響していることが確かめたことでした。

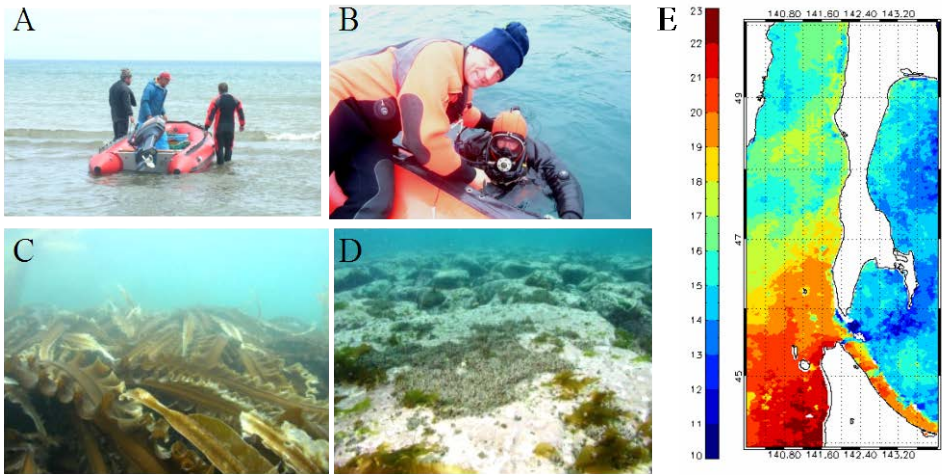


図 2、サハリン（ロシア）でのコンブ藻場調査

AとB、藻場調査に向かうダイバー。C、コンブが豊富だった過去の調査定点。D、現在の調査定点ではコンブ消失している。E、衛星写真によるサハリンから北海道の水温の分布を解析（写真と映像はガラニン・ドミトリー氏提供）。

他の発表では、従来から継続している藻礁の設置や雑海藻駆除、モニタリングデータの解析や栄養塩とコンブの関係、本州での知見や遺伝情報に着目した研究、行政としての取り組みが紹介され、内容は多岐に亘るものでした。

最後の総合討論は「コンブの生産増大に関する水産工学の貢献」をテーマに行われ、想定される調査研究のニーズとして①コンブ漁場の管理、②漁場の消失抑止、③コンブの品質向上、④養殖管理技術の向上、⑤コンブの選抜育種があげられました。また、まとめとして、これまで磯焼け対策で培った知見をコンブの生産増大にも生かしていくことが望まれ、人材、モノ、予算、知見が足りない状況の中で、水産以外の分野とも連携を強化し、新しい技術を土台に、新しい漁業が成り立つような形で推進していけば一層のコンブ産業の振興に繋がるとの方向性がまとめられました。

総合討論のまとめ

- ・磯焼けの知見をコンブ生産増大に生かす
- ・産官学の連携、水産以外の分野との連携
- ・新しい技術の上に成り立つ漁業

本シンポにより、道総研としてのコンブ資源研究の重要性がますますクローズアップされた形となりました。道総研では、本夏にコンブのミニシンポジウム「北海道のコンブ漁業の現状と生産安定に向けた取り組み」を開催することを予定しております。今後も、道総研ではコンブ研究に一層の力を入れるとともに、広く研究の取り組みを紹介していきたいと思っております。

（北海道立総合研究機構 稚内水産試験場 調査研究部 川井唯史）